

端 艇 部

委 員 新 莊 須 惠 雄

緒 言

「歴史は後向の豫言者である。」と云ふ事は、史家が唯物史觀の立場に在つても、理想主義の立場に在つても、均しく眞理であるに相違ない。けれど非才の筆に成つた此沿革史が、果して此眞理を裏書きする事が可能かどうかは保證の限ではない。唯讀者諸君の賢察に任かすより外に仕方はあるまいと思ふ。大体、史學に造詣のない私に沿革史を書けと云ふ注文からして無理な事である。況んや考證とすべき材料は龍南會雜誌唯一つあるのみである。少しばかり端艇に興味がある處から誤て委員の席を汚したのが運の盡きたと觀念して、書いて見よう、とは承諾したものの、偕て筆を取つて見ると全たく途方に暮れざるを得ない。激漚たる滄波を分けて萬里の鵬程物かは、と漕ぎ進む自稱海國男子も文筆を取つては一文の價値でもない。とは云へ餅は餅屋、沿革史は、矢張り史家の仕事だ、と今更言つた處で、緒言の筆

が直ぐに結末を付ける譯にも行かない。勇を鼓し緊禪一番簡單に要を摘んで左に「龍南會端艇部沿革史」なるものを草する。折角書いたものだから可成なら讀者の一人でも多い事を希望して止まぬ。

偕て、書くこと決まれば、次に何んな形式に依るか云ふ問題が起つて來る。筆者は再び史家に非ざる事に口を藉して、面倒な形式を避け、最も、自分に都合がよく、且つ總ての關係を明示し得られると思惟する、年代順に書き流す法を採用する事にした。其位の利己的動機を潜ませても沿革史其物の價値に大した影響は及ばさない筈だと思ふから。而し巧拙上から來る價値に對しては勿論全責任を負ふつもりである。

抑も龍南會に端艇部の設置されたのは、正に明治廿八年の事である。爾後年を閲する廿有五、以て今日に至つたものである。此長年月の沿革を餘を引き延ばした様に書き流すと、徒らに欠伸の種となるの

みであるから、別つて之を三期とする。

一、創始時代 自明治廿八年

至全 三十一年四月

二、發展時代 自明治三十一年五月

至全 三十九年四月

三、守成時代 自明治卅九年五月

至現今

無論筆者が勝手に別つたのであるから題目に當を得て居らぬ處もあり、區分も少々變挺な處が無いでもない。けれどそれは何うでも好い。要は退屈を脱れるに在る。

第一、創始時代

情、宇宙の原理を究むるに、事起るや必ず其因あり。之を宇宙の因果律と云ふ。斯んな事は誰れにでも理解し得らるゝ事であるが、この法則は、亦我端艇部の成立にも當嵌るから面白い。

端艇建造の議、初めて龍南に喧傳せらるゝに至つたのは、明治廿七八年頃の事である。即ち人も知る我秋津島根大八洲國が、清國と云ふ大敵を向ふに廻して、國民的大戰鬪を爲し大いに其覺醒を爲した時

である。「海國民」の語、一世に喧囂たる時である。畏れ多くも 明治大帝、宮廷費を御節約遊ばされ艦隊建造に愾慮を惱まし給ふ時である。如何で雄心勃勃たる龍南健兒の胸に、武陵桃源の夢が結ばれよう左に、龍南會雜誌に投書せられたものを拔萃して其熱情の一斑を覗つて見よう。

運動の種類多しと雖も、我國に於て國民的遊戲として大に獎勵せざるべからざるもの三あり曰く擊劍。曰く柔道。曰くボート是也。(中略)夫れ我國は海國也。故に我國民は海國民たらざるべからず而も桃源洞裏の海國民たるに非ずして世界の大海國民と相馳騁する大々の大海國たらざるべからず而してボートは我國民が此大々の大海國たるに於て必須缺くべからざる要具なりとす。何となればボーチングの普及は慥かに我國民の海事思想を發達せしむるに於て大勢力を有すれば也。試に思へ全國尋中以上幾萬の學生が腕鐵の如く膽斗の如く好んで海若と遊び、喜びて怒濤と交はるに至らば是實に隱然海上の一敵國に非ずや。かくの如くなれば、我國民の海事思想の發達は實に驚くべきも

のあらんとす。嗚呼ボートなる哉ボートなる哉。

(明治廿八年六月號、午後生投)

龍南の氣運正に熟し明治廿八年十月開催された、

龍南會役員會議は第二項に決議して曰く、

一、端艇會を當分龍南會に附屬せしむ、

と。かくて、武下松二郎、石坂二郎、野中季雄の

三氏を委員に擧げて艇の建造に着手し同時に一方「

龍南會附屬端艇部規則」及「端艇取扱規則」を發表

した。

前者の内容の内、重なるものを列擧すれば

第一條 本部は龍南會員の内有志者を以て組織し

漕艇運動を以て目的となす。

第二條 漕艇は練習及競漕の二とし練習は隨時之

を行ひ競漕は毎年一回春期に之を行ふ。

第三條 本部に部長一名を置き名譽部員中に就て

之を推選す。

第四條 本部に委員三名を置き本部の事務を處理

せしむ。

全部十一ヶ條から成り、後者は同じく十一ヶ條で

端艇取扱上注意すべき條項を掲げたものである。

明治廿九年一月二日艇竣工して江津湖畔に回漕せ

られた。總て三隻。名付けて花陵 (Hanaraka) 金峰

(Kido) 龍田 (Ryūta) と云ふ。一月廿五日は、龍南

會最初の端艇進水式が行はれた記念の日である。名

香島上、式場は設けられた時至つて大幸部長先づ立

ち新艇進水式を擧ぐるの辭を陳べられ次に委員武下

松二郎君成立の歴史を語る。中川會長は命名の式を

行はれ最後に十時彌君祝詞を述べて式終り直ちに餘

興競漕に移る。斯くして龍南會の端艇部は名實共に

初めて呱呱の聲を擧げたのである。左に當時發表せ

られた成立小史を摘録して之を明らかにしよう。

由來吾校端艇の設なかりしに非ず。今を去る事

既に幾星霜、當時龍南會未だ成らざるに方り、晝

湖の上既に五隻の舳舳波間に浮べるものありき。

漕艇の術尙未だ深く究められず、各々其腕力に任

せて頻りに怒濤を掣せん事を期したるのみ。或は

猥りに遠航を企て暴風に遭ひ、殆んど沈没して僅

かに漂着し、或は故らに衝突を試みて艇體を破り、

自ら水中に投じて其豪壯を誇り、以て得意となし

たる時代もありき。機運斯の如くして漕艇遂に目

的を達せず。不幸廢絶して遂に此壯快なる事業の頓挫を來しぬ。爾來屢々復興の議ありて空しく行はれず。昨年有志の輩相謀り、諸教授を訪ひて徐に其設計を企て、東奔西走幹旋最も努む。當時生徒一般の意嚮また漸く之に傾き、機運益盛にして意氣頗る昂れるを見る。未だ全く確立の目算ありしに非ずと雖も、また成立の冀望なきにしも非ず議愈々熟して其費用の調査を要するに至り、野中渡邊、今泉の三君相携へて京都に赴き、博覽會及琵琶湖競漕を觀るの序を以て大阪の某造船所に就きて問ふ所あり。斯くて代價の約束既に調ひ手附金の送附を俟ちて製造に着手する事を約しぬ。是實に暑中休暇の事也、然れ共、時正に休暇に際し諸教授の熊本に居らるゝもの寔に鮮く、學生亦離散して事を謀る能はず。荏苒日を過して遂に九月に至りぬ。これより熱心愈々加はり百難を排して事に當らん事を期し十月末遂に會員の數二百餘の賛成と教授諸君の懇切なる補助とに依りて、初めて三隻の端艇を注文するに至れり。此間、發起者諸子の苦心と周旋の勞とは、吾儕實に之を特筆せ

ざるべからず。事ここに至りて端艇に對する熱望益々盛に、會員皆成る事一日も速ならん事を欲し頻りにその着手を急ぐの他なし。是に於て世話掛各組を代表して相集り、武下、野中、石坂三君を舉げて委員となし、以て萬事の幹理を掌らしむ、乃ち大幸教授を推して部長とし、其監督を承けて以て其成立を完うせん事を謀れり、然るに會員の冀望は愈々其製造を逼り、遂に大阪に注文するものもごかしさに堪はず、幸にして若津の造船所に多少の經驗あるを知り、命じて其製造に着手せしむ實に十一月一日也。初め四旬を期して其竣工を約し、冬期休暇に先ちて之を畫湖に浮べんことを期せしかども、遅延又遅延して、約に違ふ事甚だしく、會員は怪しみ委員は苦しみ、前後六七回故らに若津に赴き、毎に二三泊に及びて之を督促し、漸く一月二日に至りて功を竣る事を得、四日百貫に着するに及べり。(中略)車を僦うて之を畫湖に輸送し來り、三隻の端艇初めて白三條の紅旗を懸して、波上に浮ぶことを得るに至れり、當初を追想して其成立を思ひ來れば、吾儕は委員諸君の功

勞を記する所なかるべからず。此に其成立の由來を録して後日の回想に供し、併せて益々隆盛に赴かん事を望んで已まず。(明治廿九年三月發行龍南會雜誌)

明治廿九年三月十二日、前委員功成りて任を、野坂嘗治、石坂二郎(再任)、富田定壽、三氏に讓る。當時の端艇部々員の意氣亦頗る旺盛なものであつた己むを得ぬ事情の爲め蹉跌を來したとは云へ、艇成つて直ちに遠航の壯圖を謀るものさへあつた程である。歌つて曰く。

筑紫の海も今日よりは

我等のものごぞなりにける

山とよせくるなみかせに

まがねのきもを鍛はばや。

尙雜誌雜報欄の一節に「嗚呼東洋の天地是より益々多事、漕げ漕げ大いに漕げ、石心鐵腸の人に非んば安んぞ能く猛鷲の狂ふを制せんや」と。以て之れが一班を察する事が可能ならう。

明治廿九年四月十二日、龍南第壹回目の春季大競漕は舉行された。光榮ある優勝旗は此時から或は喜

びの的となり或は恨みの種となつて今日まで爭奪の歴史を繰返へしてゐる。斯くて業漸く其基礎を固うして來たが、何分艇は經驗の淺い若津造船所で急造したものなので一大修理を爲すの要を生じた。十二月下旬、艇庫と共に美觀を倍加して功竣るまでの部員の焦慮は如何ばかりだつたらう。熱血男子今や脚蹠逡巡すべき時では無い、翌卅一年一月四日、寒風肌を裂く中を、近津。三角沿岸遠航の壯舉果然企てられた。彼等の歌ふ所を聞け。如何に壯烈なる事よ。

時は來れりいざ行かん

權どりなほせふな人よ、

北かせいかにつよくとも

己が望みはこゝにありや」

漕ぎ行く海は名にし負ふ

君にこゝろをつくし瀉

たとへ、荒浪たかくとも

いかで恐る、ことやある。」

ぬれし衣は凍りはて

みぞれは顔をうつとても

たゞ樂しさぞ添ひゆかん

いかでためらうことやある。」

はやてさか浪ゆきみぞれ

しのぎわてこそゆく先の

はるかにみゆる島のかげ

笑顔たゝへてむかふなれ

次で一部(緑俱樂部)有明俱樂部(二部)、江龍俱樂部(三部)各々競漕會を催し、夫れ々々今日の濫觴をなす。

明治卅年三月十三日、委員改選、左の三氏選に當る。松原常興。岩佐正雄。富田定壽(再任)。

委員任を代ふる已に三。四月十一日第貳回端艇大會舉行さる。筆者は毎年行はれる此大會及び其方面から見た漕艇術の變遷等に就て聊か所感を述べて見たいのであるが場合が許さないから遺憾ながら此問題は見えて草する事にした。と云ふのは、沿革史なるものは、草創から今日に至る總ての事件を一々漏れ無く記載するのが本分でない事、恰かも、市井の俗事が國史編纂の上に本質的構成分子とならないと同様である。此一編が沿革史と銘打つた以上、其記載事項は少くとも筆者の批判によつて、妥當性を

有し普遍性を有するものであらねばならないから。兎に角、競漕上に表はれた漕艇術は、年々進歩の跡を見せてゐる事は、過りなき事實である。

我端艇部は、斯くの如くして駭々其進運を示しては來たものゝ、悲しい事に尙ほ草創の際とて資力も豊富でなし規模も狭小で漸次朽廢して行く端艇を如何ともする事ができず、今の内に何とか方法を講せねば、當に競漕が不可能になるのみならず、折角勃興した本部も勢ひ廢止の止むなきに至る様になつた有志者茲に決然意を決して廣く一般關係者に擴張の主意を述べ寄附を仰ぐ事とした。送れる書如次。

拜啓時下愈々御清穆奉恭賀候備て當高等學校内端艇部儀創立以來漸々隆盛に赴き前途益多望の運命に相成居候處先年製造の端艇漸々朽廢の場合に立至り不便不尠候に就ては部内有志の者相謀り此際大に該部を擴張致し一般學生の爲め永遠の基礎を定むる都合に御座候。然る處端艇部は他の運動と異にして之が擴張を實行致し候には少からぬ金額を要し候事とて到底部内二三の有志者のみにては微力奈何ともいたし方なく因て甚だ唐突の至とは

存候得共該部擴張の主意書並に豫算編成の上洽く諸賢の御賛成を求め幾分の御寄附仰ぎ度奉存候御多用中恐縮の至とは存候得共別紙御瀏覽の上多少に關らず御出金の程願上候敬具。

五月廿日

石坂 二郎 吉田久太郎

富田 定壽 岩佐 正雄

松原 常興 夏目金之助

櫻井 房記 中川 元

(主意書は第二發展時代中に掲ぐ)

之れ端艇部の存立上當然の事と言はねばならぬ。果然、賛同の意を表して寄金に應募せらるゝ識者頗る多し。時偶々日清戦役に於て捕獲せる收容端艇、佐世保に於て拂下げらるゝ事あり。即ち漕艇練習用として之を購入せんとし委員を特派して八月遂に湖上に浮ぶを得た。之れ明治四十五年まで書湖を威壓してゐた旅順、大連の二艇である。三十一年一月水俣遠航に使用せられて以來、又屢々有明海、天草灘上にも其雄姿を顯はしたものである。

斯くて第一期擴張を了へ第二期擴張即ち新艇の建造と艇庫の建設を計るに及び基礎は愈々鞏固に部員

又二百を超ゆるに至つた蓋し明治卅一年四月附屬端艇部を改めて龍南會の一部となした所以である。

四月十三日の龍南會役員會にて規則の改正行はれ總則第四條中運動部の次に端艇部を記入し、全第六條「本會員は隨意に各部部員たる事を得」とし全第七條「委員十七名」とありしを「二十名」と改め但書を「但し雜誌部委員を五名とし端艇部委員を三名とす」と改められたのは、端艇部が附屬の名を脱して改めて龍南會の一部となつた事を明文上に示されたものである。

茲に草創の業成り發展時代に入る。時に委員、吉田久太郎、永村清、龜井龍水。部長岩田講師。

第二、發展時代

萬有の形を存する必ず其存在の理由がある。此理由の發現は即ち物の本質であらねばならない。人は本質を悟得し培ふ事に依つて愈々其物の發展を促進する。龍南會の一部をなす我端艇部獨り存在の理由なくして可からうぞ。此理由は、「端艇部擴張主意書」中に識してあるから抜録して之を明らかにする事とする。

運動の目的とする處は筋骨を練磨し志氣を養成するにあり。而して其組織上より區別すれば、單獨及協同の二となすを得べし。二者間敢て軒輊あるにあらずと雖も體力志氣の外別に協同一致の美風を養成せしむるものを求むれば必ずや協同組織の運動を取らざるを得ず。是れ實に歐米諸遊戯の特長にして彼邦人に一致協力的美風ある蓋し偶然にあらざるべし。今や百般文物の輸入を共に此等の諸遊戯亦續々我國に傳來し「ベースボール」「ロンテニス」「クリケット」「ラクロス」等其主なるもの皆協同組織にあらざるはなし。而して端艇競漕の一枝は特に國民的遊戯として奨勵すべき者たるを信ず。何を以て之を言ふ。夫れ國を太平洋上に建て東西には新舊兩大陸を控へ南方遙かに南洋諸島に連接し通商貿易の要路咸く我に集中せざるなし即ち營に國防の上に於けるのみならず一國經濟の上より之を論ずるも我國民たるもの焉んぞ此天與の好形勢を利用して益々通商貿易を盛んにし太平洋上の商權を掌握して以て國運の膨脹に資せざる可けんや。則ち海運事業の振起擴張せざる

可からざる亦豈に吾人の喋々を要せんや。然れども翻て考ふるに若し識者ありて雄絶快絶の計畫を海上に試みると欲するも一般國民にして海事思想を缺かば如何。是れ猶ほ樵夫に向て漁鹽の劃策を勸むるが如く吾人其成功に付て疑なき能はざるなり然らば則ち海運事業の隆盛を欲せば又務めて國民の海事思想を養はざるべからず。國民の海事思想を養はんと欲するものは先づ國民を誘ふて海嗜好を起さしむるを勉めざるべからず。而して海の一法にあらずや。是れ實に吾人が海國的國民遊戯として端艇競漕を推す所以也。抑も端艇競漕の我國に行はるゝは今を距ること殆んど十六七年前帝國大學々生の競漕に濫觴し爾來漸く盛んにして遂に地方に及び近年に至りては苟くも水利を有する學校は競ふて之を設け争ふて之が擴張を圖らざるものなしと雖も之を海國的國民遊戯となすの希望より見れば前途尙遼遠と云ふべし。我校有志夙に此に感ずる處あり、曩に一大端艇部を起して體力を強健にし志氣を養成し併せて西海に於ける海

國遊戲の關導者たらん事を以て自ら任じ苦心經營纔かに一昨年に至て之が設立を見るに至りしも奈何せん草創の際資力給せず規模狭少にして當に設立の目的を達するに足らざるのみならず我部員の操艇にすら尙は満足を與ふる能はず豈痛恨にあらずや。而して今や所屬の端艇も漸次老朽し……。

(下略)

存在の理由斯く明らかである。部員又潛艇の中に豪宕の氣を養ひ、強健の體を鍛へ、以て海國男子の眞面目を發揮せんと努力してゐるのだ。其發展や期して待つべきである。

機は熟し而かも擴張委員の多くは校を卒へて當地にあらず、事業の進捗思はしくないので茲に新たに評議員を左記の方々に委託す。之れ明治卅一年十月の事である。

教授	櫻井 房記	杉山岩三郎	武藤 虎太
	田丸 卓郎	篠本 二郎	
生徒	鍋島 資高	清家源二郎	吉田久太郎
	湯淺孫三郎	松崎 求己	岸川 太郎
戸澤 正	岩佐 正雄	和田 九市	

平田 全祐 永村 清 石川 清人
 富田 定壽 龜井 龍水 内藤 樂
 小笠原長太郎
 右の内櫻井教授監督の任に當られ會計事務を、杉山田丸兩教授担任せらる。吉田久太郎氏造艇所視察の爲め長崎に派遣せらる。

越えて明治卅二年一月、篠本教授及吉田久太郎氏再び長崎に赴き池永造船所に四艘艇四隻を注文するに至る。而して長崎醫學部教授醫學士久保成治氏及長崎船舶試驗官工學士篠原啓十郎氏(本校出身)に代表者たる事を委囑し併せて造艇の監督を依頼した。一方神水村財津氏に交渉して艇庫の敷地を借り受け當時本校築増の爲め文部省から派せられた技師新山平四郎氏に乞ひ其設計監督を依頼す。事務共に着々進捗して明治卅二年二月廿五日艇成るを告げ來り艇庫又均しく落成した。四月初旬艇畫湖に回航され十六日には盛大なる命名式及進水式が行はれた。阿蘇雲仙、英彦、霧島の四艇之である。式終て第四回競漕大會に遷る。時の部長は篠本教授で委員は左の三氏であつた。

岸川太郎、永村、清(再)、杉村徳次郎

六月新艇保存上規則の改正を行ひ乗艇取締を一層嚴重にした。

卅二年九月、委員三名なりしものを四名とし阿部寶作氏を新任す。又岸川太郎氏都合により辭任し戸次正雄氏補缺たり。

爾後卅五年四月まで異事なく、二月に委員改選、四月に競漕、時折り遠航あり。

卅三年度委員

中尾 一良 澤村 榮美 上田 徹

杉村徳次郎(再)

卅四年度委員

上床 瑞彦 西村 事代 長尾 正保

杉村徳次郎(再)

卅五年度委員

杉村徳次郎(再) 田所喜久馬 黒川 芳雄

山下 孝一

「縋蠻たる黃鳥丘隅に止まる、人にして止まる處に止まらずんば鳥に若かざるべしとかや。」けれど、青年てふ名に感激して豪宕の氣を負ふ龍南健兒が唯戰

ふて勝つを以て男子の本懐とし往々漕艇の眞精神を闕却し、無暴の舉あるは又免かれぬ處である。これ龍南會雜誌卅五年四月號に高田知一郎氏が「本末を誤る勿れ」てふ一文を草し競技の餘りに職業化せるを慨し運動の目的を離る、事遠きを知らしめし所以である。とは云へそれは端艇部の衰兆を語るものではない。高田氏も尙且つ「吾人は決して一面の弊害を見て全般の利益を没却し去るの愚を學ぶものにあらず」と云へる如く運動としての漕艇其物の必要を痛感せるが故に其弊を矯正せんとする熱誠の筆であるに過ぎない。況んや其意氣の汪んなる誠に稱すべきものあるに於ておや。吾人は寧ろ、かゝる事を責めんよりは、獅子身中の虫と云ふべき軟弱輩が端艇を以て遊興の具に供し以て得々たるを慨せざるを得ないのである。黒川委員深く之を憂へ十月五日龍南會大親睦會席上に於て、惇々其非を戒め精神修養の忘るべからざるを説き、無責任なる漕艇の結果艇の破損甚だしきを以て、規則改正の止むなきを述べられた。俄然端艇部は再び其本質を完うして隆々旭日昇天の意氣を示すに至つたのである。

卅六年二月委員改選

森 鏡 寺田 規一 藤野 幹
原 正義

卅七年度委員

西川 利行 田澤 義輔 大日 方俊
飯島 庸徳

卅八年度

小田政五郎 大日方俊(再) 池田 保

卅九年度

小田 秀吉 浦川 精一 鴛淵 信雄
志摩 二郎

同年部長田川教授辞任され早川教授後をうけらるる
膂力千人に當るとも、波濤の回倒するを止め得る
とも、濛汜の月を中天に返し得るものが孰れにある
ものぞ。實に日月に關守なく、原稿用紙三十頁を綴
る間に早やくも明治卅九年四月となつた。我端艇部
成立以來正に十年である。此時、本校工學部獨立し
て、新たに熊本高等工業學校と改稱するに至つた。

乃ち龍南會は所屬財産の内、端艇一隻(霧島)及其附
屬品一式を端艇部より分與す。お、我兄弟よ健在な
れ。此年より競争も、一部、二部、三部の三組とな
る。

端艇部は斯くして發展を果け愈々守成時代に遷ら
うとするのである。

第三、守成時代

川柳に「この位から美人だと下女眞面目」と云ふ句
がある。私に若し、ごこからが守成時代だと眞面目
に聞く人があつたら、均しく唯苦笑を以て答へるよ
り外に術を知らない。實に歴史の過程は、原因、結
果を呼び、結果又原因となつて顛末呼應し連續して
進み行くが故に、之を截斷して前後獨立せしむると
云ふ事は、難中の難、否全く事實を誤るものである
と云はねばならぬ。況んや史家の人間たる以上、各
々其見る所を異にするに於ておや。史家に於て尙且
つ然りである。門外漢の私が、明治卅九年五月より
守成時代に入る、と銘打つた事の如何に烏辭の沙汰
であるかを嘲ふものがあるなら、其れは致方もない
事である。筆者は只足曳の山鳥の尾の長たらしき劣

文を、法政寺入道前關白太政大臣藤原忠通と捧讀みに讀み下すよりも、法政寺入道、前關白太政大臣、藤原忠通と讀ませた方が、少しは眠氣醒ましにもならうと云ふ術數を弄んだまでがある。けれど、兎まれ角まれ、美人には美人たる處がある様に、守成時代と銘打つには、どう名付けて差支へないものがあるに相違ないとは思つてゐる。其處の處は讀者諸賢が、後を讀んでから判斷して下されば、それで好い事だ。

偕ても發展期に大功を成した四艇の内、「霧島」は義を重んじて高工に同行し、遺る、「阿蘇」「雲仙」「英彦」の三艇亦隱退せざるべからざる程に老朽した。明治卅九年八月六日、長崎三浦造船所に新艇の建造を命じ直ちに起工して、同三十日工を竣へたのが舊艇の名を其儘の「霧島」「雲仙」「阿蘇」の三艇である。九月十五日、回航委員十八名によつて艇は其輕快なる姿を畫津の碧水に浮べた。湖を我物顔の水鳥も此美はしき新來の客に向つては、恐らく嫉視を以て對したに相違あるまい。

四十年二月委員改選(本年度より三名に減す)

松尾 龍馬 大野源五郎 外一名不明

四十一年度

南藤 八郎 佐立 政安 松井寛二郎

四十二年度

森谷 定 野津 賀訓 金丸 愿

四十三年度

谷 守文 岡崎 泰助 安岡 惠經

四十四年度

石川 豊記 田淵 壽郎 佐藤 清熊

發展期の後を承けた守成時代だ。隆運の情勢を以て四五年はハヅミ車が廻る様に事なく進んで行く。其間相變らず四月には競漕會があつて、優勝旗に金モールのI II IIIの徴しるしが一ツづゝ殖はわて行く。何部の徴が一番多いかは、沿革史の關する處でない。既にして艇も腐朽して來た。

明治四十四年十二月長崎三菱造船所に於て、新造艇三隻、又新たに出來上つた。之れ本年まで艇庫に舊艇として繋がれて居た「阿蘇」「雲仙」「霧島」である同時に艇庫移轉の必要を生じ現今の艇庫が造られたのである。

けれど、順風に帆上げて、嚙へ烟草で行く船頭さんにも、いつか波浪高く逆風襲ふ事なきを保し得ない。ましてや、ハヅミの付いた車に思はぬ蹉跌を來す事は間々ある事である。突如明治四十五年二月龍南會雜誌に「端艇の存立如何」と云ふ穩かならぬ文を草した者がある。其言ふ處は我端艇に弊多くして利少きが故に、年々多額の費用を要する端艇部を廢して該費用を、より利あるものに用ひんに如かず、況んや畫津湖は、年々に湖底を淺うし行きつゝあるに於ておやと云ふに在る。其論する處、惰力を動力を誤認して立論せるの憾みなきに非ずと雖も、誤認せらるゝ丈けに餘りに惰力の甚だしきものありしや推知するに難からず。當時、左迄此論は影響を及ぼさなかつたけれど、大正三年新艇建造の時に至つて端なくも大論戰の原因となつた。其時天春委員が讀上げた新艇建造理由書は、大いに其蒙を啓くに足るものがあるから摘録しよう。

我端艇部は明治廿八年始めて設置に決せられしものにして翌廿九年花陵、金峰、龍田の三艇建造せらる。以後數回の改造を経て明治四十三年に至り

現在の阿蘇、霧島、温泉の三艇建造せらる。爾來乘艇者の心得或は取締規則等を設けて各年度の委員は嚴重に之を監督し乘艇者も亦責任を以て之を使用せり。然るに我部に於ては平穩なる江津湖上の漕艇を以て能事終れりとなす能はず進んで海に親しみ怒濤と戦ひ益々海國男子が眞面目を發揮せんが爲めに例年遠漕を企て休暇日曜等を利用して遙かに艇を三角天草の海上に浮べ以て身心の鍛鍊に資する處あり。爲めに龍南剛健の士氣に裨益する處少なからざるものあり。以て端艇部本來の主旨理想に適するを得しと雖も其使用の度の甚たしきに従つて幾分艇體改造期の早きを免れず。從來三年乃至四年を以て改造するを例とせり。然而現在の艇は己に約五年間之を使用せり。昨年に至りては己に「霧島」「阿蘇」の兩艇は其艇腹に致命傷とも謂ふべき大破損を生じ他の一艇「温泉」も或は舷を破損し或は舵器を損じ且つ三艇共に艇底及び舷側に夥だしき歪み又は破損を生じ爲めに假令之に一大修繕を施すと雖も競漕用としては勿論普通乗用としても亦甚しき困難を感ずるに至れり(下略)

尙ほ畫津湖の水深減少説に至つては、等しく天春委員の示した江津村々長及縣廳技師の證明に依て、全く虚構の説なる事を知る事が能きる。

其間、明治四十五年度に

八幡屋春太郎 大岩復一郎 横山 鐵夫

大正二年に

川久保泰助 堀見 東市 正 成人

の委員を経て、當時任に在つたのは天春昌次君を始め

室本 豊次 石井 正己

の三氏で事は十月二十二日午後三時、瑞邦館に於て端艇新造豫算會が開かれた時に起つたのである。

壁頭、反對論を演べられたのは演説部委員津田元一氏であつた。次で討論數刻、平塚部長、天春委員等、上述の理由により極力反對論の誤れるを説き、遂に三十七名對六名の多數を以て、豫算案を可決するを得た。かくて端艇存続の必要を具体的に示し、守成を美事、爲し了せたのである。

實に、二十年の歴史を有する端艇部、奈何ぞ存在の要なくして、今日まで其盛運を贏ち得んや。一度

其本質を明示した時、新造豫算案は、大多數の賛同を得て可決を見る又當時の事と云へよう。

大正四年三月四日、役員會議によりて左記決議

端艇は建造後四ケ年半を經過すれば新に建造するを得る事とし新造基金として毎年金貳百七拾圓を積立つる事。但し大正四年度に於て借越金貳百九拾五圓を償還せざる可からざるにつき大正四年度乃至大正八年度の基金は左の如く按排して積立つる事。

年度	大正四年	大正五年	大正六年	大正七年	大正八年
基金	三五圓	三五圓	三五圓	三五圓	三〇圓

右

(但し今日は建造價格騰貴して、かゝる割合にては到底、四年半毎に建造し能はざるは明白な事實である)

かくて端艇部は今や何等の顧慮なきまでに其基礎を固うした。後繼者たるもの宜しく其盛運に慢するなく常に善く其本質を研め、其名を恥かしむる事なく以て龍南會の完美を期すべきである。

大正四年度委員

小西常太郎 松平 恒若 前川 正元

大正五年度委員

宮崎 隆藏 森 清彦 中村郁太郎

(大正六年度以下倉卒の際とて考證を得ず略)

結 論

「常に時代の影響を受けて變化するものを存在物と云ふ」と定義したものがあつた。現今、我國一般に茫然として勃興し來つた端艇熱は、如何なる變化を、我端艇部に及ぼすか、端艇部も一存在物である以上

多少たりとも影響せられずには置くまい。考へて見れば、随分面白い問題であるけれども、遺憾乍ら、沿革史は、過去を取扱ふべきもので、それが未來を豫示し得るにせよ、得ないにせよ、現在の一刹那から一步も未來に筆を越させる事は能きない。私は、茲に、我端艇部の現在を生んで下さつた過去の人々に對して感謝の念を以て擱筆する事とする。

「吾々の文化は現在の生者よりも、遙かに多くを過去の死者に負ふ。」一句理由もなく頭をかすめて行く

—一九二〇、十、二六—